

小池 宏明 牧師

今回のイエス様の自己証言は「わたしはよみがえりです。(わたしは)いのちです。」(25 節) という箇所である。イエス様は、死んで墓に納められたベタニア村のラザロを生き返らせる前にこの証言をされた。それはイエス様が真の神であることを示すためだった。聖書では、永遠なる神様と交わりがあることが「いのち」があることなのだ。

*イエス様とマルタの対話

イエス様は、ベタニア村のラザロとその姉妹マルタとマリアを愛していた。もし、イエス様が居合わせたならラザロの病を癒やし死ぬことはなかったはずだ。ところがイエス様はラザロが死んで墓に葬られてから 4 日も経ってベタニア村に着いた。イエス様を迎えに出てきたマルタには、あきらめと悔しさが滲み出ている。(21 節) そのような時にイエス様ははっきりと宣言した。25、26 節「イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」」イエス様は、ここで、肉体の死のことを語っていない。もっと先の永遠のいのちのことを語っている。それは、イエス・キリストを信じるかどうかにかかっている。イエス様は繰り返して強調された。「わたしを信じる者は・・・」「わたしを信じる者は・・・」「あなたは、このことを信じますか？」マルタは、27 節のように信仰の告白をした。「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております。」マルタは、主なる神様との永遠の交わりを頂いた。

*あなたはキリストを信じますか

ちは、イエス様の招きにどのように応答するだろうか。単なる知識ではなくて、はっきりと心からイエス様を信頼して生きるのかが問われている。救い主イエス・キリストを心から受け入れて、肉体が死んでも生きる死に打ち勝つ人生を全うするのか、それとも、救い主を受け入れずに、孤独な死の闇を歩むのか、選択が迫られている。私たちは、やがて、必ず死を迎える。キリストにある肉体の死は、絶望やあきらめ、悔しさではなく、喜びと感謝の溢れる御国へとつながっている。また、地上にあっても永遠なる神様とのつながりが与えられて、キリストとの交わりの中で生かされていく。まことに豊かな、神様との生きた交わりを楽しむ人生へと再出発しよう。